

三重県志摩漁村片田における近代の漁法の変化と 漁村社会の対応

高 木 秀 和

I はじめに

(1) 研究の背景

三重県志摩半島を対象とした地域社会の研究を振り返ると、民俗学のほか村落社会学の立場からまとめられた成果が数多く蓄積されてきた（牧野編1994；牧野1996）。伝統的な村落社会学では、おもに農村社会が研究対象となってきたが、農山村とは異なる原理で漁業を営む村落が構成、維持されている実態を改めて提示した（川越・後藤編1970）。

彼らの志摩漁村への主たる関心は、総有漁場で営まれる伝統的な採捕漁業である海女漁と、大正・昭和戦前期に拡がりを見せはじめたシステム化された真珠養殖がどのように並存しているのか、そして村落構成員の共有財産といえる総有漁場をどのように守るのか、という点であった（中田1966；中田1967）。他方、彼らは総有漁場の外側で営まれる「エンケル（ユンカー）型」漁業であるカツオ・マグロ漁船の乗組員の社会関係などにも着目し、漁法の違いにより生じる構造的差異を明らかにしようとした（牧野1996）。しかし、一連の志摩漁村研究では、これらの漁法のうちから一、二の漁法に関心がもたれ、多くの漁法が並存している漁村の研究は、あまり蓄積されてこなかった。

地理学では、志摩漁村を対象とした研究を、池野（1957）、大喜多（1989）、池口（2001）

らが行なっているが、いずれも海女漁と漁場や資源との関係を扱った成果である。

そこで本稿は、漁法の多様性に着目して、近代の志摩漁村のなかでカツオ釣漁村であり海女漁村でもある「磯浜カツオ釣漁村」を選び出し、真珠養殖の導入や拡大に代表される近代化以前の志摩漁村の原型を確認し、この時期に漁村の経済、社会がどのように変容したのか、そして船元、網元層と彼らに雇用、もしくは磯漁に従事する一般漁民がどのようにその変容に対応したのか、という点を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究対象地域の設定

まず、明治初期の志摩地域⁽¹⁾における漁村を概観し、研究対象地域を設定することを目的に、当時の海産物の産出状況を確認する。図1は、中田（1997a）にある1880（明治13）年の「鰹船漁村志摩海産表」をもとに、海産物全体の「収益」と産出された海産物の組み合わせを地図上に示したものである。その際、海産物の組み合わせは鰹節、アワビ、エビ、クロメ、ワカメ、ヒジキ、テングサの産出額の合計のうち、その1割以上を占める海産物を対象とした⁽²⁾。

それによると、この時期の志摩地域におけるカツオ釣漁村は現在の阿児町甲賀から志摩町和具にかけてと浜島町浜島の計10か村であり、大王町名田以北はそれ以南に比べると

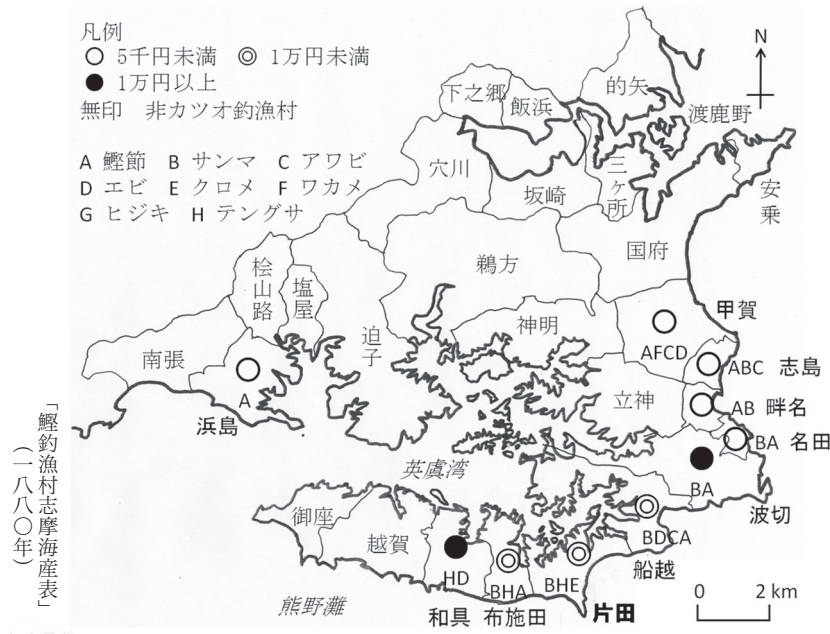


図1 志摩地域のカツオ釣漁村における海産物の収益と組み合わせの分布(1880(明治13)年)

注1：ゴシック体の村名がカツオ釣漁村、明朝体の村名が非カツオ釣漁村を表す。

注2：坂手村(現・鳥羽市)もカツオ釣漁村であったが、現在の志摩市域外のため除外した。

資料：中田(1997a)により作成。

収益が低いことがうかがえる。収益の大きい順に村を並べてみると、和具と大王町波切は収益が2万円を超え⁽³⁾、以下志摩町布施田、大王町船越、志摩町片田は8千円を超えている。

産出された海産物の組み合わせをみると、上位5ヵ村のうち和具を除く各村の第1位はサンマであり、テングサなどの海藻類の産出額は大きいものの、アワビのウェイトはさほど高くないことが分かる。中田(1997a)によれば、冬季のサンマ漁はカツオの漁閑期にその船元たちが営んだ漁法であり、カツオ釣漁とともに重要な漁法であった。また塚本(2010)は、伊勢神宮の御師制度が廃止されたことによりアワビの需要が激減した一方、明治政府がテングサを加工した寒天の中国輸出を奨励し、志摩一円でも「テングサバブル」と呼べる状況にあったことを指摘している。このような状況が当時の海産物の産出額

に反映され、布施田や片田のようにサンマとテングサ、あるいは船越のようにサンマとエビやアワビなどの根付資源や、大王崎周辺のようにサンマと鰹節の組み合わせなどが磯浜漁村にみられた。

これらのことから、志摩地域におけるカツオ釣漁村10ヵ村のうち第5位の収益を記録し、当時カツオ釣漁とともに行われたサンマ漁がさかんであり、テングサをはじめとする磯の資源にも恵まれている片田を、志摩地域の「磯浜カツオ釣漁村」の典型例とみなして研究対象地域に設定する。

II 研究対象地域の概況

当時、三重県英虞郡片田村と呼ばれた現在の志摩市志摩町片田は、志摩半島のうち大王崎以西の先志摩半島と呼ばれる地域に位置し、南は熊野灘、北は英虞湾に面しており、

西は志摩町布施田、東は大王町船越に接している。

隆起と沈降の繰り返しによりできた海蝕台地上にある片田の集落には、昭和20年代まで旧片田村域の中央部を南北方向に低湿地の「潟田」が広がっており、それが地名の由来になったものと思われる。この部分が、片田を大きく二分する地域単位である「郷」の境界にあたり⁽⁴⁾、東側の大野郷には熊野灘側に広大な砂浜海岸である大野浜が広がり、それに連続して台地の下に密集した集落が展開している。西側の乙里郷は、南に張り出した麦崎半島と台地部分からなり、より伝統的な漁業集落は麦崎半島の付け根の部分から岬に向かって延びている。さらに乙里郷は、乙部、大里、女鹿の3集落に細分することができる。また、村役場、漁協事務所のほか、郵便局、商店街、氏神である八雲神社や来迎寺はじめ4か寺も乙里郷に分布している⁽⁵⁾。

片田村民は、「郷意識」と呼べる自らが居住する郷への帰属意識をもっていた。地先に岩礁が卓越する乙里郷の女鹿集落を除けば、1950年頃まで郷が運営する郷民皆参加が原則の地曳網（地下網）が営まれ、とりわけ広大な砂浜海岸が広がる大野郷の地曳網の規模は大きなものであった（平賀2001）。

片田の明治初期（1880年）の人口、戸数は2,924人、525戸であり、1920（大正9）年には3,061人、566戸となった。福永（1954）によれば、1920年の人口を100とすると、以降5年刻みに1925年97、1930年104、1935年113、1940年115、1945年132となり4千人を超え⁽⁶⁾、人口が増加傾向にあったことがうかがえる。

片田は伝統的に「主漁副農」の半農半漁村であり、『志摩町史 改訂版』（2004）によると、1878年の「海産収金」は8,252円あまり、「陸産収金」は4,421円あまりであり、両者には2倍近くの開きがあった。

なお、2013年調査の漁業センサスによる

と、片田では200人、100経営体が漁業に従事しており、営んだ漁業種類別経営体数の上位3位をみると、採貝・採藻49経営体、真珠養殖27経営体、真珠母貝養殖19経営体となっており、以下その他の刺網17経営体、その他釣13経営体、のり類養殖12経営体が続き、今日では「磯浜カツオ釣漁村」とは言い難い。

ここからは、とくにカツオ・サンマ漁の盛衰に着目して、船元、網元層と非船元、非網元層である一般漁民に分けて考察をすすめる。その際、片田の漁村社会への影響もあわせて検討する。

III 近代における漁法の展開と船元・網元の対応

(1) カツオ・サンマ漁の繁栄期

表1は、図1とほぼ同時期の1878年の片田における1年間の水揚げ金額をまとめたものである⁽⁷⁾。ただし、エビの水揚げ金額が不明であり、テングサをはじめとする海藻類の記載がないためにデータとしては完全なものではないことに留意する必要がある。この表によると、サンマがエビと海藻類を除くと全体の水揚げ金額の半分以上を超えており、それにカツオが次いでいる。一方、アワビの水揚げ金額は5%を割っており、前述したような伊勢での消費量減少が影響していると考えられる⁽⁸⁾。

片田における当時の漁家経営の一端をみるために、同じく1878年のデータを用いて、大王崎以西の熊野灘沿岸8か村における戸数、船数、1戸あたり船数を整理した（表2）。このなかで1戸あたり船数に着目すると、片田以東と布施田以西で傾向が異なることが分かる。すなわち、後者は1戸あたりほぼ1艘の漁船を所有していた計算になるのに対し、前者は1戸あたり1艘未満であり、片田は5戸あたり3艘という計算となる。片田

表1 片田における魚種別水揚げ金額とその割合 (1878(明治11)年)

	数量	水揚げ金額(円)	水揚げ金額の割合(%)
カツオ	17,832尾	1,961	38.17
サンマ	780,000尾	2,694	52.43
エビ	2,000貫	—	—
アワビ	110貫	243	4.73
トビウオ	30,000尾	150	2.92
ムツ	20,000尾	30	0.58
ボラ	250尾	12.5	0.24
イワシ他雑魚	—	47.62	0.93
計		5,138.12	100.00

注：表中の「—」は不明を表し、エビはイセエビを指す。

資料：『志摩町史 改訂版』(2004) により作成。

表2 大王崎以西8か村の戸数、船数と1戸あたり船数 (1878 (明治11) 年)

	戸数	船数	1戸あたり船数
波切	701	380	0.54
船越	361	244	0.68
片田	525	308	0.59
布施田	368	332	0.9
和具	522	625	1.2
越賀	257	213	0.83
御座	146	150	1.03
浜島	315	310	0.98

資料：波切、船越、浜島は中田 (1997a)、片田から御座は『志摩町史 改訂版 (2004) により作成。

以東の漁村でこのような傾向が現れるのは、小舟を用いて磯漁を営む漁家が他村に比べて少ないうえに、男性たちが磯漁などを兼業することなく、船元の経営するカツオ釣漁船に船子として雇われていたことが影響していると推測される。一方、和具は図1からうかがえるように夫婦や家族単位で営むイセエビ刺網漁のウェイトが高いため、カツオ釣漁村でありながら小舟も多かった。布施田は、片田と和具の間に位置することから、両者の境界ゾーンとして位置づけられるだろう。また、片田以東では限られた地先海面と水産資源を保護するために、小舟の所有が制限されていた可能性もある。

表3は、聞き取りなどをもとに再現した、片田における1892・93(明治25・26)年頃のカツオ釣漁の船元の一覧である。この表によると、片田には8戸のカツオ釣漁の船元があり、そのうち6戸が乙里郷に分布していた。当時、同村には乗組員15人程度の「塗り船」が8艘、12人程度の「エンパ船」が3艘あったとされ(『志摩町史 改訂版』2004)、少なくとも160人程度の船子がいた計算となる。前述したように、カツオ釣漁のほかに冬季のサンマ漁にも従事していたことから、ほぼ一年にわたり出漁していた。ただし、カツオ釣漁に関する資料は残されていないために⁹⁾、その経営の実態を明らかにすることはできない。

片田のカツオ釣漁により漁獲されたカツオは、魚買付船や運賃船(後述)により移出されたこともあったが(『志摩町史 改訂版』2004)、同村が消費地市場から遠距離に位置することもあり、その多くは鰹節に加工された。片田では1893年に47戸の鰹節製造業者が存在したとされ(中田1997b)、片田の4倍にのぼるカツオ釣漁の船元がいた和具(『志摩町史』1978)では42戸であった。前掲の図1を作成するために用いた「鰹船漁村志摩海産表」によると、片田の鰹節の産出額は415円、和具は1,775円であった。この2つ

表3 片田における1892・93(明治25・6)年頃のカツオ釣漁の船元

居住地区	漁業組合長	村長	カツオ釣漁衰退後の生業など
1 乙里(大里)	○(初代)	○ 1910.9~11.7	庄屋の末裔、地主
2 乙里(乙部)	○(3代)	○ 1913.7~14.9、 1921.10~22.5	自宅に郵便局を開設
3 乙里(大里)	○(6代)	○ 1905.12~07.10、 1919.7~20.5、 1927.3~29.10	缶詰工場を経営 (のちに山口県へ進出)
4 乙里(大里)	○(11代)		戦後、組合長在任時に大型定置網漁を導入
5 乙里(女鹿)			四艘張、網元A(乙部)と共同経営も 戦後も漁家経営(海女漁や釣漁など)を続ける
6 乙里(乙部)			運賃船も経営
7 大野			詳細不明
8 大野			醤油醸造、戦後は昭和40年代まで真珠養殖を営む

注1:「漁業組合長」、「村長」欄の○印は経験者を、前者の()内は重複を除いて何代目かを、後者の年月は在任期間を表す。なお、漁業組合長は村長が兼任したとされる(『志摩町史 改訂版』2004)。

注2:船元5は図2の網元Cと同一であり、「カツオ釣漁衰退後の生業など」欄の「網元A(乙部)」は同図網元Aと同一である。

資料:「居住地区」、「漁業組合長」、「村長」欄は『志摩町史』(1978)、「カツオ釣漁衰退後の生業など」欄は聞き取りにより作成。

の資料の間には10年以上の開きがあるために注意を払う必要があるものの、片田で製造された鰹節から得られた利益は、未熟な加工技術に起因する品質の問題などもあり多くはなかったと思われる。

(2) カツオ・サンマ漁の衰退後

ところが、明治20年代に入ると志摩一円でカツオが不漁になり(中田1997a)、船元の経営を逼迫させた⁽¹⁰⁾。また、冬季のサンマ漁による水揚げ金額の高さがカツオ釣漁を支えていたともいえるなか、片田に西接する船越の多角経営資本家が明治末期没落し、その要因として「日本資本主義の発展にたいする志摩地方の立ちおくれ」や、1913(大正2)年1月に発生したサンマ漁船沈没事故により、片田の3人を含む51人の死者、行方不明者を出したことが挙げられ、後者により船越の漁業の中心が磯漁業へと変化した(中田1966)。

片田もこれらの影響を受けたことが推測され、遭難事故に着目すれば、船越より早い1901(明治34)年12月に表3の船元5が経営するサンマ漁船が暴風雨で遭難し、乗組員15人全員が死亡した⁽¹¹⁾。現在の旧船元5の当主への聞き取りによれば、当時の当主から遭難事故を契機にサンマ漁などの「沖商売」をやめ、後述する四艘張漁などの「近場の漁」へと営む漁法を変えたという話を聞いたという。片田でも、カツオの不漁やサンマ漁船の遭難事故などが、カツオ釣漁の船元がカツオ・サンマ漁から手を引いた要因のひとつと考えられる。表3の船元のなかで、その後も漁業を続けたのは船元5のみであり、筆者の聞き取りによれば、後述する四艘張漁の網元を含め、その子どもたちに「これからの時代は陸(オカ)の仕事だ」と教育して漁業から手を引いたケースが多かった。そして多くの旧船元、網元家は、戦後片田から地域外へ転出した。

表3の「カツオ釣漁衰退後の生業など」欄に着目すると、元船元たちは片田の名士と呼ばれるような人物が多く、船元2のように自宅に郵便局を開設したり、缶詰工場（船元3）や「運賃船」（船元6）と呼ばれる運搬船を経営する者もいた。また、カツオ・サンマ漁の船元として活躍した明治時代はもとより、大正・昭和時代に村長や漁業組合長を歴任した者もあり、彼らはカツオ・サンマ漁衰退後も片田のなかで漁業以外の面でも一定の地位を保ち続けたといえる。

参考までに農地改革を経た1970年頃の乙里郷の小字である乙部、大里、女鹿、麦崎（女鹿集落の一部）の公図をみると、ある元船元は宅地と畑地あわせ1,390坪あまり、別の元船元は宅地のみで680坪弱の土地を有していた。この4小字の個人所有地の平均面積は約230坪であり、この2戸に限れば戦後も比較的広い土地を有していた。

前述したように、カツオ釣漁の船元5が遭難事故によりカツオ・サンマ漁から手を引いたあと、四艘張漁に着手している⁽¹²⁾。四艘張漁は、小型定置網が普及する前にさかんに営まれた平敷網の一種であり（海の博物館編1988）、片田では数軒の網元により経営された。四艘張漁は魚群の襲来を待つ「寄魚漁業」であり、聞き取りによれば一年のうち長期にわたり営まれた漁業ではなかった。したがって、四艘張漁に参加する網子たちは、日常的には海女漁のトマエ（船頭）やイセエビ刺網漁などを営み、網元から招集がかかると四艘張漁に参加した。聞き取りによれば、カツオ釣漁のように正月に船元宅で前年の決算と新年の計画を立てる会合を兼ねた新年会は行われなかったという。旧網元宅で網子の名簿の有無を確認したところ、存在しないとのことであり、このような片田の四艘張漁の経営形態から、網子の名簿は作成されなかった

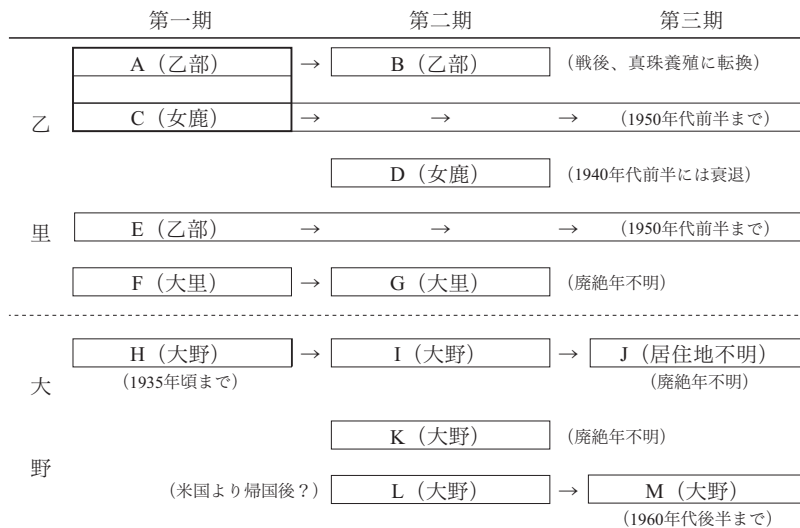


図2 近代における片田の四艘張網元の模式図

注1：おおよそ第一期は大正期から昭和戦前期まで、第三期は戦後を指す。

注2：A～Mは網元を表し、()内の地名は網元の居住集落を示している。

注3：網元AとC（表3の船元5と同一）にかかる太枠の四角は、共同経営を表す。

注4：聞き取りによれば、図示した網元以外に乙里郷の乙部集落と、大野郷に各1軒の網元があったが、詳細は不明である。

資料：聞き取りにより作成。

可能性がある。これらのことから、四艘張漁の網元・網子関係には、カツオ釣漁に認められるような強い垂直的構造はみられなかったことが推測される。

図2は、聞き取りにより明らかとなった四艘張漁の網元の変遷を時期別にまとめたものである。おおよ第一期を大正期から昭和戦前期まで、第三期を戦後期とし、第二期をその中間とした。図によると、網元C(表3の船元5)、Eのように第一期から第三期にわたり四艘張経営を行った網元がみられた一方、他の多くの網元が経営不振や後継者の不在などを理由⁽¹³⁾に、経営を他の網元に譲渡している。その際、旧網元は使用していた漁網を新網元に有償で譲渡しており、網元Jのように居住地不明のケースがあるものの、旧網元と新網元は同じ郷内、しかも乙里郷では同じ集落の者に経営を譲渡している。網元A、Cのように同じ郷内の隣接する集落の網元が共同経営を行ったケースもみられ、網元経営とその譲渡においても郷という地縁的な要因が強く機能していたことがうかがえる。

ところで、四艘張漁には多くの網子たちが参加し、聞き取りによれば1統の四艘張網を操業するために、網の四隅に漁船が1艘ずつ配置され、ほかに餌をまく「見舟」と船頭役が乗る舟が必要であり、それぞれに3~4人が乗ったために、船頭を含め合計15~20人の人手が必要であった。この図は網元の変遷を意識して作成したものであるため、たとえば第二期に8軒の網元が同時に四艘張網を営んでいたことを意味するものではないが、第一期や第二期には100人前後の網子が片田にいたと考えられる。

IV 一般漁民の対応

前章では、近代の片田におけるカツオ・サンマ漁とその船元や網元の動きをみながら、おもに片田内部における漁法の変化を追っ

た。それをうけて、本章ではおもに一般漁民が漁業の変化や漁法の展開に対してどのように対応したのかという点について、片田外部に向かう動きにも着目しながら明らかにする。

塚本(2010)によると、明治初期の磯漁の漁獲対象のウェイトが、アワビからテングサなどの海藻類に移ったが、明治20年代の半ばには志摩地域で、災害や乱獲に起因する深刻な磯焼けや磯荒れなどが発生し、テングサの収量が大幅に減少した。その結果、1889(明治22)年の日本朝鮮両国通漁規則の公布もあり、自村の磯で経験不足により思うように水揚げを得ることができない若年の海女を中心に朝鮮への出稼ぎが相次ぎ、志摩一円の海女が集団、組織的に渡航した。福田(2006)は故郷である片田で独自に聞き取り調査をすすめ、朝鮮へ渡航した男性37人、女性(海女)65人の名簿作成に成功している。

この時期は、カツオ・サンマ漁が衰退しはじめた時期にもあたり、漁業に従事していた船子をはじめとする当時の片田村民たちは新たな対応に迫られたことが推測される。同時期に横浜の「アメリカ居留民保護の警備隊の陸軍大尉宅」にて住み込みで働いていた片田出身の伊東里きは、彼の家族の帰米をきっかけに1889年に渡米を決意した(里き・源吉の手紙を読む会編2011)。彼女は1894年に一時帰国し、片田の青年3名らを伴い再度渡米した。

その後、1900年頃から片田からアメリカ移民が急増し、片田は三重県の「アメリカ村」と呼ばれるようになった。筆者は、いくつかの既存文献の名簿を組み合わせたところ、166人の片田出身者の氏名のほか、75人の渡航年や渡米後の足取りを確認することができ、1906~07年頃と大正期に入った1918年頃にアメリカ移民のピークがあったことを明らかにした(高木2013)。

とりわけ移民が多かった前者の時期は、カ

ツオの不漁やサンマ漁船の遭難事故後にあたり、片田の漁村経済構造に変化のみられた時期に該当する。また、後者は四艘張漁が網元により営まれ始めた時期とほぼ重なるが、移民者数の多さは漁業との関連というよりも、前者の渡米ピーク時にアメリカへ移民した片田出身者が事業などに成功し、家族や親族らをアメリカに呼び寄せたことが移民者数の数値に影響していると考えられる。

ただし、アメリカへの移民者は一般漁民の階層だけではなく、筆者が入手した名簿や聞き取りから、上層階層の家族も渡米したことがうかがえる(高木2013)。さらに片田出身の移民はアメリカだけではなく、アジアを中心に各地に広がった(高木2014)。

V おわりに

本稿は、三重県南東部に位置する近代の英虞郡片田村(現在の志摩市志摩町片田)の漁村社会が、漁法の変化に対してどのように対応したのかを、カツオ・サンマ漁の船元や敷網漁の一種である四艘張漁の網元と、それらに船子・網子として雇用された一般漁民に分けて考察した。その際、片田の漁村社会内部はもちろん、筆者らの既往研究などをもとに移民や出稼ぎとして外部へ向かった動きにも着目した。

明治時代初期には、カツオ釣漁の裏作として行われていたサンマ網漁や、テングサをはじめとする海藻類が片田で産出される主要海産物や漁法であった。しかし、明治時代中期以降になると、カツオの不漁、サンマ網漁船の遭難事故や、自然生態環境の変化や乱獲にともなう磯焼けや磯荒などが発生した。そして、その結果が、「沖商売」であるカツオ・サンマ漁の船元や網元の没落、テングサをはじめとする海藻類の取量減少となって表出した。片田の漁村社会では、それらに対応するために四艘張漁を開始し、新たな漁場を求め

て朝鮮へ出稼者を送った。また、多くの片田村民がアメリカへ移民し、三重県の「アメリカ村」と呼ばれたほどであった。

このように、本稿では一連の志摩漁村研究のなかで、カツオ釣漁村でもなく、磯漁のみに従事する漁村でもないという意味で、研究が蓄積されてこなかったタイプの漁村である片田の漁村社会の変容を、漁法の展開を追うことにより明らかにした。近代、「磯浜カツオ釣漁村」として両者の性格をあわせもっていた片田では、漁村社会内部では沖漁であるカツオ・サンマ漁から地先漁業である四艘張漁へ漁法が交代し、ほぼ同時期には漁村社会外部への押し出しとしてアメリカ移民がみられるなど、片田特有のかたちで変化に対応したといえる。

ところで、本稿の反省点として、資史料不足という点は否定できず、それを補うべく戦前期の状況を知る年長者への聞き取り調査という定量化しにくい方法で研究をすすめたことが挙げられる。今後、資史料の発掘はもちろん、戦前期の様子を知る人が少なくなってきたこともあるために、継続的に聞き取り調査を重ね、客観性のあるデータを集めていきたい。また、戦後以降の真珠養殖の発展による区画漁業権漁場の広がりも含めた漁場用益の変化とともに、砂浜海岸が地先に広がる大野郷に対して、磯浜海岸の多い乙里郷というような漁場生態環境の相違へのアプローチも課題となる。さらに、本稿で取り上げなかった戦後以降の動きともリンクさせ、漁法の展開を整理しながら、漁村社会のダイナミクスを明らかにしていきたい。

註

- (1) 本節で取り上げる地名は、いずれも現在の志摩市を構成する地区名である。本稿では、初出地名を「志摩町片田」のように、平成の合併以前の旧町名と地区名(当時の村名)を併記する。
- (2) 生カツオの産出額は不明であり、「エビ」はイセエビを指す。また、本稿でいう「産出額の合

- 計」とは鰹節からテングサまでの8品目の産出金額を合計したものであり、「収益」とは異なる。
- (3) 除外した坂手村の収益は2万円台であり、大王町波切に次ぐ位置にある。
- (4) 井阪(1883)によれば、「片田」とその一部として「小大野」(ヲオホノ)が立項され、『志摩町史 改訂版』(2004)にも「片田村は、この片田と大野とを併せたもの」という記述がみられる。乙里郷と大野郷を行き来するためには、その中間にある「潟田」を通過しなければならないため、両者間の心理的距離は大きかった。なお、現在「潟田」には三重交通バスの「片田新開」という停留所が設置されている。
- (5) 片田村当時、村役場に併設するかたちで漁業組合事務所が開設されていたが、志摩町への合併後は旧村役場前に独立した漁協事務所が建設された。現在、旧村役場の建物はなく、漁協事務所は英虞湾側の大野浦に移転した。また、村役場に隣接していた金剛院は、「潟田」付近へ移転した。
- (6) 『志摩町史 改訂版』(2004)によると、志摩町合併前の1953年の片田の人口、戸数は4,058人、808戸であった。
- (7) 中田(1997a)によれば、このデータは1879年2月に明治政府の命に従ってまとめられた水産調査によるもので、「上申書」は県資料として残存しておらず、片田の「村控え」も『志摩町史』(1978)編纂で利用したのちに行方不明となった。
- (8) なお、同資料により1877年の「一カ年収益」をみると5,538円64銭であり、ここから翌1878年のエビと海藻類を除く全体の水揚げ金額5,138円12銭を引くと400円52銭となる。第1図に示した「鰹釣漁村志摩海産表」によると、片田のエビの産出額は400円であり、サンマの産出額は両者ともに2,694円と記録されている。資料をよく吟味する必要があるものの、エビの水揚げ金額は400円程度と推測される。
- (9) 中田(1997a)は、片田では藩政時代からカツオ釣漁がさかんに行われてきたが、その実態を明らかにする資料がないと述べている。
- (10) 中田(1997a)は、「冷水塊による黒潮の蛇行により海流が順調な方向をとらなかったことが最大の要因」(71頁)と述べている。
- (11) 和具の漁船も同月に2度の遭難事故に遭遇しており、合計15人が死亡した(『志摩町史 改訂版』2004)。
- (12) 正確な開始年は分からないものの、片田の船子3人も亡くなった1913年の船越のサンマ漁船沈没事故の存在も考慮すると、大正時代前期にあたる1910年代には開始されたと考えてよいだろう。
- (13) 聞き取りによれば、図2の網元Aは太平洋戦争中にパラオで鰹節製造を行った(高木2014)。

文献

- 池口明子(2001)「アマ集団の漁場利用と採集行動—三重県志摩町和具地区の事例—」『人文地理』53、574-589。
- 池野 茂(1957)「徳川時代の海女漁業の「むら」—三重県志摩町を中心に—」『人文地理』9、197-208。
- 井阪丹羽太郎(1883)『志摩国旧地考』精心社(復刊:三重県図書館協会1970)。
- 海の博物館編(1988)『漁の図鑑 伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁具と漁法』光出版。
- 大喜多甫文(1989)『潜水漁業と資源管理』古今書院。
- 川越淳二・後藤和夫編(1970)『村落 その構造と系譜』川島書店。
- 志摩町史編纂委員会(1978)『志摩町史』志摩町教育委員会。
- 志摩町史編纂委員会(2004)『志摩町史 改訂版』志摩町教育委員会。
- 高木秀和(2013)「近代におけるアメリカ移民の輩出とその要因—三重県志摩市片田を事例に—」『年報・中部の経済と社会』2012年版、149-158。
- 高木秀和(2014)「三重県志摩市片田における近代移民の社会経済的要因—カナダ・パラオ移民を中心に—」『年報・中部の経済と社会』2013年版、185-197。
- 塚本 明(2010)「近代の志摩海女の出稼ぎについて」『三重大史学』10、37-59。
- 中田四朗(1997a)「資料 志摩国における鰹釣漁業史(2)」『海と人間』25、2-74。
- 中田四朗(1997b)「資料 志摩国における鰹釣漁業史(3)」『海と人間』25、75-137。
- 中田 実(1966)「真珠養殖業の導入と沿岸漁村の変容—三重県志摩郡大王町船越—」『愛知大学文学論叢』32、73-101。
- 中田 実(1967)「戦後における真珠養殖業の発展と沿岸漁村の変容—三重県志摩郡大王町船越—」『愛知大学文学論叢』33・34、309-342。
- 平賀正光(2001)『片田稲荷神社誌』。
- 福田清一(2006)『志摩と朝鮮を小舟で往復した志摩の海女 北は礼文・利尻、南は八重山まで往った志摩の海女たち』。
- 福永正三(1954)「志摩郡人口の地域的特性」『郷土志摩』12、1-18。
- 牧野由朗編(1994)『志摩の漁村』(愛知大学総合郷土研究所研究叢書IX)名著出版。
- 牧野由朗(1996)『志摩漁村の構造』(愛知大学総合郷土研究所研究叢書X)名著出版。
- 里き・源吉の手紙を読む会編(2011)『故国遙かなり—太平洋を渡った里き・源吉の手紙』ドメス出版。